

# R

KANSAI  
UNIVERSITY  
NEWS LETTER



Man is a Thinking Reed.

# reed

No. 4

March, 2005

関西大学ニューズレター

発行日：2005年(平成17年)3月15日

発行：関西大学 企画室広報課

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 / TEL.06-6368-1121

<http://www.kansai-u.ac.jp/>

■インタビュー

森本 靖一郎 (理事長)

## 創立120周年、さらに 「強い関西大学」へ

厳しい社会状況は、天が与えてくれたチャンスだ —1

■リーダーズ・ナウ—5

在学生—文学部1年次生・高橋 大輔 さん

卒業生—邦楽鳴物師・囃子方・望月 太八紀さん

■大学最前線「教育プロジェクト特集」

司法過疎問題を解消するために

「地方で活躍する法曹を育てたい」—7

大学院法務研究科—木下 智史 教授

コンセプトが違う実用的 e-Learning

「現場で使えなければ意味がない」—9

工学部システムマネジメント工学科—冬木 正彦 教授

■トピックス [学内情報]

大学院外国語教育学研究科開設4年目の新展開 —11

外国語教育のキーパーソン育成を目指す

大学院外国語教育学研究科長 齋藤 栄二教授

■連携事業

安全な自然エネルギー

風力発電の未来を描く —13

工学部先端情報電気工学科—安田 陽 助教授

商店街活性化のカギは若者の発想にあり! —14

商学部—三谷 真 助教授

■関大ニュース—15

中長期戦略構想策定に向けて—

落語家・桂三枝さんが客員教授に就任 ほか





■インタビュー



## 創立120周年、さらに「強い関西大学」へ

— 厳しい社会状況は、天が与えてくれたチャンスだ —

### 森本 靖一郎 ◆ 理事長

少子化、長引く不況、国立大学の法人化など、私学を取り巻く状況は年々厳しさを増すばかりです。しかし、昨年10月に就任した森本靖一郎理事長は、「このピンチこそ関西大学のさらなる発展のチャンスだ」と力強く語ります。来年、創立120周年の節目を迎える関西大学。そのかじ取りを担う森本理事長は、「強い関西大学」にすることを使命とし、すでに改革に着手しています。アイデアと行動力には定評があります。学生時代の思い出から、母校への深い愛情、中長期の大学運営のあり方、JR高槻駅前に建設予定の超高層キャンパス構想など、縦横無尽に語っていただきました。

飛鳥文化研究所・植田記念館 ▶

強い関西大学をつくるということは、  
教育に強い、研究に強い、社会連携に強い、  
ITに強い、入学試験に強い、  
就職に強い、そして財政に強い、  
もちろんスポーツに強い：  
すべての面で「強い関西大学」を  
構築するということです。

### ◆120年の歴史と伝統、脈々と伝わる関西大学の心

— 理事長は、関西大学の文学部と法学部の両方を卒業されました。学生時代の思い出やエピソードなどからお聞かせください。

文学部のときには先輩の谷沢永一先生（現名誉教授）らと毎日、侃々諤々の議論をやっていました。谷沢先生は当時大学院生で、同じ金子又兵衛先生の門下生。在学中の思い出としては、やはり文化人で洒落な金子又兵衛先生のことが強く印象に残っています。大学にマントを着てこられ、研究室で三味線を弾いておられた。阪急グループ創始者である小林一三氏と対談したり、藪内流の茶道も宗匠で立派な先生でした。私は文学部国文学科の卒業を迎え、もっと勉強したくなった。正直に言えば、少々青春を謳歌しすぎた。今度はじっくり勉強したいと思い、法学部に学士入学したのです。

当時は、学生寮で学友と寝食を共にし、命も惜しまないような熱い友情がありました。素晴らしい恩師や先輩方、たくさんの友人たちにもまれて、今日の私がある。課外活動では応援団長を務め、ボクシング、フェンシング、剣道、柔道と、実にいろいろやったものです。

— 当時の関大運動部は強かったのですか。

施設は貧しかったし費用もなかったけれど、とても強かったですね。グラウンドは一つ、体育館も一つしかなかったのに、野球も、陸上も、ボクシング、柔道などすべてに強かった。私より4学年下に、大学野球日本一のバッテリーを組んだ阪神タイガースの村山実君と阪急ブレーブスの監督、上田利治君がいたし、剣道もサッカーも日本一になった。文化系のサークルでは、詩吟をやったり、写真部が合宿に行くという、そのときだけ部員になるとか、私はそんなマルチチャンネルの学生でした（笑）。

### ◆学生、教職員、卒業生、そして父母の“四位一体”大学教育論を实践

— 卒業後も関大に奉職され、関大発展のために尽くしてこられました。

私が大学に勤め、「関西大学教育後援会」の仕事に任されたのが1963年、幹事長になったのが67年でした。当時、日本の大学は学生と教職員と卒業生、この三位一体でやっていた。若い私は“四位一体”の大学教育論を展開した。「子どもの母校はわが母校」というモットーをつくり、学生の親も大学教育の中に参加していただいたわけです。66年には千里山学舎で父兄懇談会を行いました。その時なんと5,000人ものが参加され、その情熱に大変驚かされました。63年には大学から外へ出てご父母との近郊父兄懇談会を開きました。65年には高松、岡山、福岡など地方へ。その後、2年ごとに全国30カ所を回るローテーションを組んで、毎年教育懇談会を続けてきました。

初めは授業への出席状況や成績表を持っていくと、父母には喜ばれますが、学生本人がいやがる。しかし、家庭では、これを契機に親子の対話が始まりました。

「大学と家庭のかけ橋になる」—これが教育後援会であるという考え方は、父母と大学との交流を密にし、その後の激しい大学紛争の早期解決にもつながったと自負しています。

また、全国で初めての父母対象の就職説明懇談会も開催し

ました。こうして父母に関西大学への愛着を醸成したために、親子孫三代が関大出身というご家庭も多くおられます。もちろん、わが家も親子三代です。

— 愛校心を父母、卒業生、さらに地域にも広げていったことが、セミナーハウス建設や飛鳥史学文学講座の開講にもつながったわけですね。

教育後援会では大学にとって有益なさまざまな事業を興しました。中でもセミナーハウスの設立・運営には情熱を傾けました。元教育後援会会長の植田正路氏が、奈良県明日香村の高松塚古墳の壁画発掘で苦勞した学生のために拠点をつくってあげたいと私財を寄付してくださいました。こうして「飛鳥文化研究所・植田記念館」が誕生しました。

セミナーハウスはキャンパス内の教室や研究室とは違った雰囲気の中で、友情を育む生きた学習の場となり、研究活動における豊かな知的交流を深める場ともなっています。ほかに、長野県白馬の「白馬梅池高原ロッジ」や六甲山頂近くにある「六甲山荘」の充実した施設を設けました。

高松塚古墳発掘で陣頭指揮を執った網干善教先生（現名誉教授）を中心に、大学の文化や学術を地域に還元しようと、明日香村中央公民館で「関西大学飛鳥史学文学講座」を開講しました。私が檄文を書いてスタートした講座が今年4月で31年目になります。毎月欠かさず続けており、通算372回を数えています。公開講座がこれほど長く続いているのは他にはあまり例がないでしょう。このような社会貢献も重要な大学の使命だと思っています。

### ◆生きた学問を教える「学的美化」で、粘り強い学生を育成

— 古典や考古学にも深い理解と関心があつたのですか。

私は小学生のときから万葉集など古典に親しんでいました。明日香村にほど近い三輪山の麓、織田有楽斎の城下である織田村で生まれ、考古学のメッカと言われた奈良県立畝傍中学（旧制）の出身ですから、考古学はもちろん大好きです。網干先生はその学校の先輩です。国のまほろばで歴史と文化のど真ん中





に育ち、空気を吸っているだけでも、古典や考古学に親しむようになるものですね（笑）。

— 関大生の特徴、学生気質などをどう思われますか。昔と今で違いはありますか。

関大生には、派手さ、きらびやかさはないけれども、どんな世界でも生きていける逞しさがありますね。関西法律学校時代を経て私立関西大学へ。1922（大正11）年、大学（旧制）へと昇格したとき、当時の総理事・学長の山岡順太郎先生は、新しい大学の教育理念として「学の実化」を提唱されました。私はこの言葉を実践主義ととらえています。理論倒れをしない、生きた学問を教えるところがまさに関西大学。どこにいても粘り強さを発揮する学生気質は、昔も今も変わりません。いつの世でも「今どきの若い者は」という声は出るものですが、パソコン、携帯など持っているツールは違っていても、やはり誰かと対話し行動している。手段が違うだけで、みんなワイワイやっていることは昔と同じですね。

### ◆スーパーSINET、新キャンパス構想、「強い関西大学」を目指して改革！

— 昨年10月1日、理事長に就任されて、改めてどのような決意をされましたか。

私は理事長就任に際して、「強い関西大学」をつくると宣言しました。その一例が世界最高速ネットワークのスーパーSINET。本学は2004年度の新規接続拠点として文部科学省から選定され、全国で30機関（国立15研究所等、国立11大学、私立4大学）の一角に加わりました。この運用が開始されたことにより、10ギガビットの超高速ネットワークを活用して、グリッドコンピューティング、ナノテクノロジーなどの分野の先端学術研究に大いに貢献することは間違いありません。国立大学では東大、京大など。私立では早稲田、慶応、同志社と本学だけ。私もこの採択を受けるために骨身を削る思いで努力しました。大学人である以上は情報の重要性を十分知っていますからね。ただし、情報は人間が使うもので、情報に人間が使われてはいけません。

— 少子化、国立大学の法人化、私学の経営難などの状況を踏まえ、今後、理事長としてマネジメントについてどうお考えですか。

私は、状況が厳しいのは“天が与えてくれたチャンス”だと思っています。右肩上がりのときには、それほど大学に特色がなくてもやっていけます。強い関西大学をつくるということは、教育に強い、研究に強い、社会連携に強い、ITに強い、入学試験に強い、就職に強い、そして財政に強い、もちろんスポーツに強い…すべての面で「強い関西大学」を構築するということです。確固たる強さを持たなければ、大学経営なんてできません。例えば、就職率99.9%を誇ろうとも、就職できなかった0.1%の学生にとっての就職率はゼロにすぎない。関西大学は、終生、卒業生の面倒を見る大学です。

現在、関西大学には小学校を除く幼稚園から大学院までの教育課程がありますが、初等教育から高等教育までの一貫教



◀高槻新キャンパス完成予想図

「総合学生会館 メディアパーク 凜風館」

▼完成予想図

▶建設風景



社会に貢献する大学でなければ、21世紀を生き延びることはできません。そのためには構成員一人ひとりの意識改革が必要です。

育を標榜するとき、小学校が無いことはその一貫性を欠くこととなります。

私は、「幼児教育から社会人教育」という新たな教育理念のもとに、30階建ての超高層学舎で幼稚園から大学院、さらに生涯学習までの一貫教育を実現することを構想してきました。

このたび、JR高槻駅前に建設することを発表しましたが、そこでは、幼稚園や小学校のカリキュラムに英語の授業やお花、お茶を採り入れたり、中学校や高等学校では一部の科目を英語で授業することも考えています。

さらに、大学においては従来の使命（文明の継承、知の創造、人格の陶冶）に加え、社会貢献という視点で地域との共生や世界の人々に貢献できる学問領域を採り入れた、例えば防災や環境などに関する新学部も構想しています。この構想は新聞やテレビ報道で大きく取り上げられ、世間の注目を集めました。今後はその具体化に向け、全力で取り組んでいきたいと考えています。

### ◆新しい体制で中長期戦略構想を策定し、改革を実践する

— 経営基盤の安定のために、今後どういう取り組みをされますか。

財政の確立は大学運営にとって最重要課題です。私は、必要なお金は出します。先生方が立派な教育を行うこと、研究をしその成果が社会から評価されることは、すべて関西大学の発展とステークホルダーへの責務を果たすことに繋がるからです。

現状、本学に対する評価はいろいろありますが、事務職員に対しては、人事考課と目標管理を導入し、厳しい評価制度を採用しています。先生方の定年は65歳ですが、教育上必要な先生は5年を上限に延長されています。この制度を厳格に適用し、新たな教育と研究に情熱を燃やす先生に来ていただきたいと考えています。そのためには、先生の定年問題に真剣に取り組めます。そして教育・研究の活性化を図ります。

いま、社会が大学に期待する度合いは従前にもまして強く

なっています。国も知識基盤社会を目指しています。やはり、社会に貢献する大学でなければ、21世紀を生き延びることはできません。そのためには構成員一人ひとりの意識改革が必要です。改革という以上は、断固としてやらなければ意味がない。改革に意欲のない、現状に甘んじている人や組織は、今後は淘汰されていくでしょう。逆に、やる気のある人、成果をあげた人は表彰もするし、重要なポストで働いていただく。私の任期4年の間に将来の関西大学の基礎を築き、社会に貢献できる、期待される大学にしていきたいと願っています。

— 改革を実践する新しい体制についてお聞かせください。

昨年12月に、学園の中長期戦略を考える体制を一新し、従来からあった会議を廃止して新たに4つの会議を置きました。

新しく出来たのは、まず「基本構想推進会議」。これは理事長の諮問機関として設置したもので、理事、副学長、校長・園長、局長職等に加わっていただきました。本学の将来ビジョンを考え、点検・評価する少数精鋭の集団です。

「戦略会議」は理事会の諮問機関で、「基本構想推進会議」のメンバーと理事若干名、教学から学部長等に参画していただきます。これは、学校法人と教学の役職者が一堂に会して学園の将来を考える会議で、これまでの関西大学には無かった、非常に画期的な組織です。「戦略会議」の検討部会として「経営専門委員会」と「教学専門委員会」を設けました。

さらに、外部の有識者の知見を大学の経営に反映させるため「経営審議会」という組織も設けました。また、外部のシンクタンクにも、どういう新しい大学を構築すべきかの検討をお願いし、多様な視点を改革に反映させていきます。特に財政基盤確立と教育の構造づくりには、強い意志を持って対応します。教育ばかりでなく、研究の充実や社会貢献も視野に入れた取り組みを強化します。

何よりも大切なことは、学校法人の意思決定を迅速に行うということです。もはや、少数の人や一つの組織が反対したからといって、大学全体の構想がストップすることが許されるような時代ではありません。

### ◆関大人としての誇りを持って！ 創立120周年は飛躍への転機

— 着々と改革が進んでいますね。最後に、教職員や学生・父母の皆さんにメッセージをお願いします。

創立120周年に向けて、学生たちの人間力・社会力を培うコミュニケーション広場としての「総合学生会館 メディアパーク 凜風館」の建設や、強い関大スポーツの復活のため「関大スポーツ振興基金」の設立などの記念事業が進んでいます。

教職員には、帰属意識をしっかりと持って一所懸命に、運命共同体的な考えをもってやってほしい。来年の120周年は、一つの転機としてのジャンプ台と考えています。

単に記念行事を成功させ、記念の施設を建設すればいいわけではない。皆が心を引き締める機会にしてほしい。社会に貢献する大学という使命を、一瞬たりとも忘れないでほしいですね。そして、関西大学の杜から、関西の地盤復権のために共に力を尽くしたいと存じています。

学生が誇りを持ち、卒業生が立派な社会人として活躍することが、関大のバックボーンになります。学生、校友、父母、地域の人々に開かれた大学にしたい。学内に「なんでも提案室」を設けて、辛口の意見もどンドン聞きます。これからも“四位一体”で関西大学を大いにもり立てていきます。

自分の子どもの出身校を褒められたくない親はいません。さらに子ども以上に、関西大学を愛してもらいたい。関西大学に入れてよかったと親も胸を張れる、そういう学園をつくるのが私の生涯の使命だと思っています。理事長就任時にも宣言しましたように、任期4年間でやるべきことは全部やる、4年で出来なければ、いくら時間をかけたって出来ない、それが私の強い決意です。

— 「朝、東京に出張したかと思えば、午後には千里山の本部で仕事をしている神出鬼没の人」という周囲の評もあります。山積する課題にエネルギーに対応する新理事長に期待いたします。

森本靖一郎（もりもと せいいちろう）  
 ■1932年奈良県生まれ。関西大学文学部国文学科、法学部卒業。母校に奉職し、67年に関西大学教育後援会幹事長に就任。「大学と家庭のかけ橋」をモットーに、関西大学と父母との間に信頼の絆を作り上げた。事業局長、常務理事を経て、2000年専務理事、2004年10月理事長に就任。



# LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

## 成功も失敗も自分次第、 楽しみながら滑る

フィギュア界の期待を背負い、  
プラス思考で世界選手権代表に

●文学部1年次生  
高橋 大輔 さん



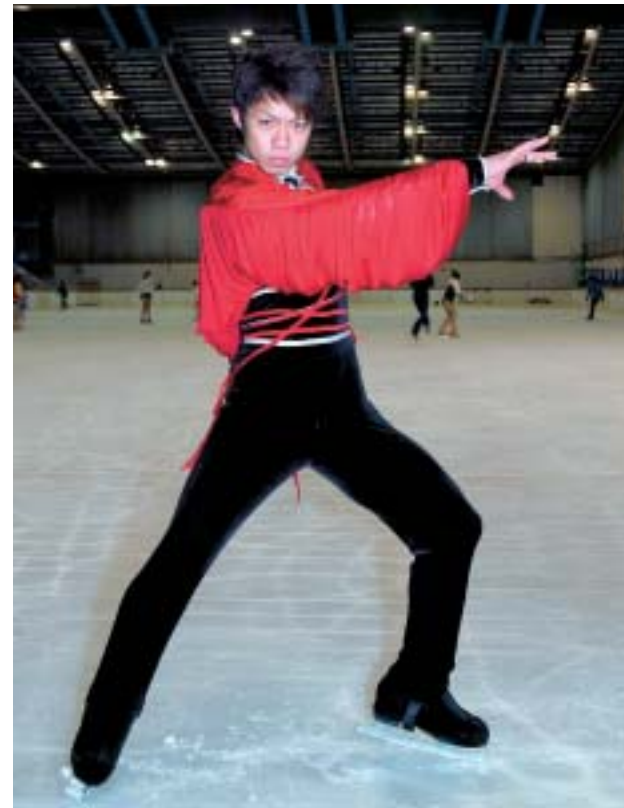
高橋 大輔—たかはし だいすけ  
■1986（昭和61）年、岡山県倉敷市生まれ。文学部1年。2002年世界ジュニア選手権優勝、2004年全日本選手権3位、2005年第22回ユニバーシアード冬季大会優勝。トリノ・オリンピック強化指定選手。

銀盤の上を軽やかに舞うフィギュアスケートは、ウィンタースポーツの花形です。8歳からスケートを始め、2002年に日本人初の世界ジュニアチャンピオンとなるなど輝かしい実績を持つ高橋大輔さんは、2006年トリノ・オリンピック日本代表の有力候補。2003年よりシニアの世界大会にデビューし、昨年の世界選手権で11位と健闘。今年2月に韓国で行われたフィギュアスケートの四大陸選手権ではフリーで2位と踏ん張った結果、3位となりメダルを獲得。4回転プラス3回転のコンビネーションジャンプなど、難易度の高い技に果敢に挑むフィギュア界のホープの素顔に迫りました。

インスブルックで1月に開催されたユニバーシアード冬季大会では、フリーの演技で見事な逆転優勝。やまなし・ゆめふじ国体でも優勝と、2005年は高橋さんにとって快調なスタートとなりました。昨年9月に左足くるぶしを負傷したこともあり、本調子ではなかったのですが、「昨年末の全日本選手権が終わったところから気持ちが吹っ切れたんです。以前のようにプレッシャーで逃げたくなるようなこともなく、驚くくらい楽しんで滑ることができました」。

今はとにかく滑ることが心地よく、「練習していても去年の1時間と今年の1時間は全く違う」。そして、2月18日に韓国の江陵で行われたフィギュアスケートの四大陸選手権でメダル獲得。フリーで2位となり、計192.29点で3位に。3月にモスクワで開かれる世界選手権代表の座を手に入れました。

「トリノ・オリンピックにももちろん出たいけれど、その前に選考の場となる大会が大事。どの大会も、自分の気持ちを試合にどう向けていくかということを念頭に置いて滑っています」



スケートを通じて発想がプラス思考に変わり、「他人と比較しない、自分は自分」、不本意な結果だった時も「うまくいかなかったものはしょうがない」と、切り替えが早くなったと言います。

長いスケート人生は、倉敷に住んでいた小学2年から始まりました。泣き虫だった息子を鍛えようとした両親にアイスホッケーの見学に連れて行かれたものの、防具を付けた選手の姿が怖くて受け付けず、興味を持ったのは同じ氷上のフィギュアスケート。それからめきめきと頭角を現し、ジュニアの国際大会で優勝するまでになります。週末に大阪行きの新幹線で練習に通った中学・高校生時代を経て、現在は週6日、大阪府高石市のスケート場で技に磨きをかけています。

「なんとなくの興味で始めたスケートが、いつの間にか生活の一部になっていました。どんなことでも自分が本当に興味を持てるかどうかはやってみないと分からない。気になるものがあれば、どんどんチャレンジしてやりたいことを突き詰めたらいと思っています」

プログラムの曲目で気に入っているのは、今シーズン使用している『アランフェス協奏曲』のような民族色の濃い音楽や、重低音が鳴り響く重厚な楽曲。

「好きな曲で滑ると、気分が乗ってしんどさも消えます。自然と曲の中に入りこめて、表現しやすいんです。たくさん観客が見ている中で広いリンクを独り占めできるのが、フィギュアスケートの魅力。集団競技と違って成功も失敗も自分次第という怖さがありますが、いい演技ができて大きな拍手で迎えられたときの気持ちよさはたまらない」

成長著しい高橋さんの氷上の勇姿に今後も注目です。



## 伝統和楽器の魅力を 若い世代に伝えたい

関西邦楽界を担う若手鳴物師として  
仕事に、普及活動に励む毎日

●邦楽鳴物師・囃子方  
望月 太八紀 さん —経済学部 1988年卒業—



望月 太八紀—もちづき たやのり  
(本名 山地勝紀)  
■1962（昭和37）年、大阪市生まれ。1988（昭和63）年、関西大学経済学部卒業。在学中から鳴物師・望月太津八郎師に師事。1992年、望月流の名取りに。民謡鳴り物・鼓月流の名取りでもある。

鳴り物とは小鼓や太太鼓、当たり鐘、鉦や擬音に使われるものなど約30種類の和楽器の総称で、別名お囃子と呼ばれます。歌舞伎や文楽などでは、山おろし、風雪、雨、波音などの自然現象を表現するのに鳴り物が欠かせません。この鳴り物の奏者として関西の伝統芸能の舞台上で活躍しているのが、望月太八紀さんです。関西大学在学中に所属していた落語研究会で鳴り物の魅力に取りつかれ、21歳から9年間の修行を経て名取りに。一般になじみの薄い伝統文化を広めようと、大阪市生涯学習インストラクターや地域の青少年指導委員なども務めるエネルギッシュな太八紀さんに、鳴り物への思いと抱負を語ってもらいました。

「関西大学の学生は庶民的な苦学生のイメージ。雨の中で傘をさして自転車をこいでいるようなたくましさや、“関大DNA”なんじゃないでしょうか」と、笑顔で語る望月太八紀さん。在学中は落語研究会に所属。「当時の大学の寄席ばやしは生演奏で行うのが流行で、各大学とも競って1~2名の部員は三味線のけいこに通っていました。私も最初は三味線を習うつもりだったものの、生徒がいっぱいで習えなかったため、紹介されたのが鳴り物・囃子方の師匠」とのことです。

「関西に鳴物師は少なかったもので、周囲と違うことをやるのが誇らしくて」、けいこに通っている間に鳴り物の虜になり、プロを目指そうと21歳で内弟子に。関大卒業後も病院に勤務しながらけいこに励みました。

小鼓や太太鼓、締太鼓など多種の楽器をマスターしなくてはならない鳴物師は、一人前になるには時間を要する職業です。9年間の修行を経て名取りとなり、22年目の現在、春・秋

のシーズンを中心に国立文楽劇場、松竹座、京都歌舞練場などの舞台上で演目を支えます。仕事の合間には自宅で教室を開いたり、鳴り物を世に広めるための活動に取り組んでいます。

その一つが学校支援人材バンクへの登録。2002年から小・中学校で邦楽の授業が始まったため、和楽器の経験のない教師に代わり、太八紀さんのような人材が求められたのです。

「大阪市生野区の中学校で篠笛を中心に指導しました。子どもは覚えるのが早くて、15分ほどで一曲を演奏できるようになるんです。文化祭では教え子たちと『さくらさくら』などを演奏したのですが、浴衣を着たところ雰囲気がぐんとよくなって、みんな大喜びでした」

小唄方、日舞師範との舞踊発表会をはじめ、福祉施設での公演や障害者イベントにも参加。帝塚山学院大学の邦楽サークルや在日外国人の邦楽演奏グループの指導も務め、バイタリティあふれる毎日です。在学中も就職活動で忙しい4年次に100周年祭の学生実行委員会にかかわるなど、常にやりたいことに全力投球してきました。

「職人芸の鳴り物の世界では、世襲の名取りが大半を占めるからこそ伝統が守られている面もありますが、私のような後発組にしか見えないものもあると思います。変えてもいい部分と変えてはいけない部分を線引きしつつ、若い世代を巻き込みながら発展させていけたらいいですね。私もまだまだ修行の身です」

やりたいことを極めるには、自分のペースで身近なところへ目を向けることから始めよう。そんな前向きさがあるからこそ、長い修行時代も乗り切ることができたのかもしれない。雨にも負けず、風にも負けない“関大DNA”は今も健在です。







■大学最前線「教育プロジェクト特集」

文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」

文部科学省が社会的要請の強い教育テーマに取り組む大学などを選定し、重点的に財政支援する「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」（平成16年度）に、本学のプロジェクト「進化するe-Learningの展開-授業と学習の統合的支援および教授法と学習コンテンツの共有化-」が採択されました。

コンセプトが違う実用的 e-Learning 「現場で使えなければ意味がない」

進化するe-Learningの展開 —授業と学習の統合的支援および教授法と学習コンテンツの共有化—

◎工学部システムマネジメント工学科 冬木 正彦 教授



紙と鉛筆があればよいと言われた理論物理学の世界から、計算機を使うシステム開発の分野に転じた一研究者が作り上げた教育システムが、日本の高等教育のあり方を大きく変えようとしています。ITを活用して教育現場の諸問題の解決を支援するそのシステムの特徴は、徹底して実用的であること。それを可能にしたのは、開発者の冬木正彦教授自身が、設計者であると同時に利用者であり、多くの企業との共同研究を通じて、常に実用レベルのシステムを志向してきたからです。平成16年度の文部科学省「現代GP」に採択されたテーマについて取材し、システム開発の歩みにスポットを当てました。

■産学連携で「使えるソフトウェア」を開発

「進化するe-Learningの展開-授業と学習の統合的支援および教授法と学習コンテンツの共有化-」が、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」のテーマ「ITを活用した実践的遠隔教育（e-Learning）」に採択されました。このテーマには国公私立大学の108校が応募し、厳正な審査の結果、15校（内、私立大学4校）が選ばれました。理論物理学の研究をしていた冬木先生が、このように実用性を十分に備えたシステムを手掛けるようになった経緯から――

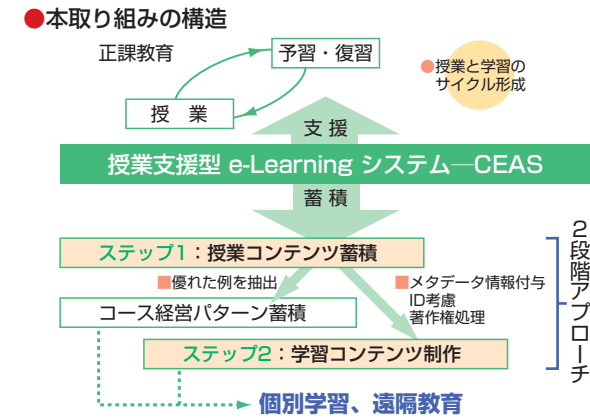
京都大学理学部物理学科から関西大学工学部に着任して以来、理論にとどまるのではなく、現実には有用な技術を生み出すことを研究の基本方針としてきました。理論物理の研究手段として、1970年ころから多数の計算機を使っていました。その計算機の技術を期待されて工学部に来た以上、過去のことをスパッと忘れて情報システムをどのように作るか、作ったものをどのように運用していくかを考えました。

大学時代の友人が日本電気（NEC）にいたこともあり、一緒に「生産マネジメント」の分野で研究を始めました。計算機を使って工場のモノの流れをどのように表現するか、モノの流れがどう見えるか、シミュレーションの世界です。1984年から始めた生産システム評価のためのシミュレータ開発が、現実世界のモデル化からソフトウェア開発におけるオブジェクト指向を重視する契機となりました。

やる以上単なるお遊びではなく、役に立つものでなければ駄目です。計算機を使ったシステム作りは、大学の中だけでなく現実に使われるところまで仕上げないと何にもなりません。90年代の初めころ、NECは半導体生産で世界のトップだったのですが、開発したシミュレータは半導体の生産工場での生産計画作成に使われました。さらにNECにより商品化された生産スケジューラは、住友金属工業などの製造工場でも使われるようになりました。まさに産学連携だったわけです。

■現場と開発者とのギャップをどう埋めるか

《もう一つの大きな研究テーマである「インターネット技術」のほうは、次から次へと新しい技術やビジネスモデルが登場している分野です。1995年10月にスタートした関西大学のホームページは、冬木先生が中心になって立ち上げたものです。また、インターネットを利用して生産者から途中の加工業者を通して消費者のところまでの流れを追跡し、食の安全を確保する品質保証システムを開発。これは、温度、湿度の変化に対する鶏卵の変化予測など、生産地から店頭まで食品のトレーシングを行い、品質を保証し危険性を予測するシステムです。この種のシステムは、現在急速に広まりつつあります。実用的なWebベースのシステム開発のノウハウは、今回のe-Learningにも生かされています》



正課教育における授業と学習のサイクル形成と、2段階アプローチによるコンテンツ制作およびコース経営パターンの蓄積

コンピューターの世界は日進月歩。目まぐるしい変化の中にあって、本当に役に立つものを見抜く力が必要です。最先端の技術で、これは本物か一時的なものか、かぎ分ける能力です。1984年にシミュレータを開発する際、言語を何にするか悩みましたが、最終的にC言語を採用しました。それが当たり前。まだ参考書が2冊ぐらいしかなかったのですが、当時採用したオブジェクト指向が今は主流になっています。

大切なのはコンセプトであり、モデルの作り方、表現の仕方です。授業支援型e-Learningシステム「CEAS（シーズ）」“Web-Based Coordinated Education Activation System”は、他のe-Learningシステムと決定的にコンセプトが違います。

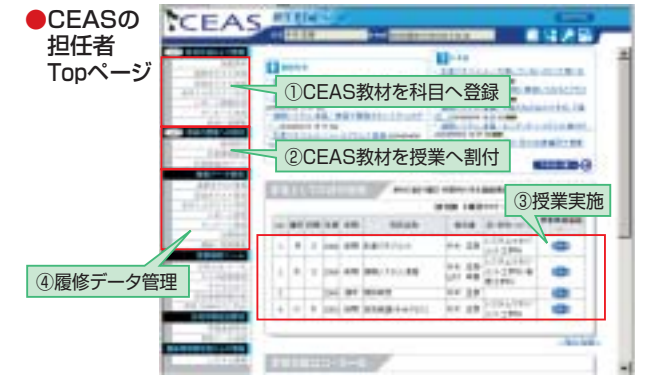
我々開発者がいいと思うモデルで作っても、利用者にとって使い物にならないことが多い。現場の人の考えと開発者の考えはそもそも違うものなのです。そのギャップをどう埋めるか。e-Learningシステムというのは幸いなことに、教師の私は利用者でありながら設計者でもある。利用する先生の真意も分かるし、両方の立場できちんと判断できる。表面的にこんな機能もほしいと言われて、はい、付けますと即答しては駄目なのです。逆に、いくら難しくてもこれは絶対にやらないといけないとか、的確な判断が必要です。

■現場の担任者が便利で使いやすいものを

《2002年9月に工学部オープンデザイン（OD）教室に導入された自発型オープンデザインシステムには、双方向教育を進める手段として、e-Learningシステムが組み込まれました。しかし、導入時のシステムは個別学習支援を目的とし、大学における集合教育を支援するシステムとしては不十分でした》

そこで、私の研究室ではパナソニックラーニングシステムズと共同研究プロジェクトを立ち上げ、授業と学習を統合的に支援する自発学習促進クラス授業支援システムCEASの開発に着手しました。院生・学生が頑張って開発に協力した結果、2002年11月にCEAS1.1、2003年1月にCEAS1.2、9月にCEAS2.0、2004年6月にCEAS2.1と次々にバージョンアップしました。新バージョンはその都度、工学部での運用に供しました。

CEASが学内外で普及してきたのは、従来のe-Learningシステムにない特徴を備え、機能の一つひとつが教育現場で試され磨かれてきたからです。対面授業での出席管理機能や小テスト実施機能、学期末の成績評価支援機能、科目単位での教



左側の機能選択メニューには、①授業資料、選択式テスト作成、記述式テスト作成、記号入力式テスト作成、レポート課題作成、アンケート作成、②教材割付、科目環境設定、科目独自のページ、③授業実施、④履修データ管理、⑤履修環境管理者からの情報」などのツールメニューが表示されている。

材の一括ダウンロード/アップロード機能など、授業支援や多人数クラスでの成績評価に必要な機能を、担任者の使い勝手を重視してバランスよく配置しています。

■日本の教育環境に即したシステムに進化

《2004年度の後期からは、ITセンターにCEAS用サーバを設置し、他学部の教育支援のためのサービスを開始。また、オープンソース化し、非営利目的利用の教育機関へCEASを無償配布するとともに、導入と運用をサポートしています。すでにCDを150枚くらい、110校に配布し、多数の大学や学部で使われています。冬木研究室では、さらに中学・高校向けのバージョンも開発中です》

学生は自宅からインターネット接続すれば、CEASを用いて予習・復習ができます。「授業と学習のサイクル形成」をしっかりサポートします。これによって、基礎学力の低下や学力の多様化に伴う大学教育の諸問題を解決し、授業の改善や外部評価に対応することができます。

また、科目履修者のみに公開される教材などの授業コンテンツの中から適切なものを選んで蓄積し、インストラクショナルデザイン(ID)を考慮して、著作権とメタデータ情報付与の処理を施し、それを学内外に公開可能な優れた学習用コンテンツとして保存する「2段階アプローチ」を可能にしました。

同時に、教育の質が向上した例を蓄積データの中から選び、コンテンツと合わせて優れた教育方法のパターン（「コース経営パターン」と呼ぶ）として蓄積し、公開することができます。それにより、教授法と学習コンテンツの共有化が可能になります。

このように今までのモデルを徹底的に見直し、コンセプトの違いを強く意識した結果、アメリカとは異なる日本の教育環境に即した実用的なe-Learningシステムに進化してきたのです。

現代GPシンポジウム開催

「ITを活用した教育の質の向上」をテーマに、第1回関西大学現代GPシンポジウムが1月19日、千里山キャンパスで開催されました。前述の通り本学のプロジェクトが現代GPに採択されたことを契機に、教育におけるIT事業を推進する文部科学省と私立大学情報教育協会、それに先進的に取組んでいる諸大学を招いて開催したもので、約200人が参加しました。

◎取組についての詳細は、以下のホームページをご参照ください。  
<http://www.kansai-u.ac.jp/gp2004/index.html>



関西大学大学院外国語教育学研究科は、「外国語教育学」を専門的に教育・研究する日本初の研究科として、2002年4月に誕生しました。学部をもたない関西大学初の独立研究科として現在、修士74名、博士21名が在籍し、次年度からは新しいカリキュラムが導入されます。開設から3年間の歩みを振り返り、これからの課題や取り組みについて、研究科長の齋藤栄二教授に伺いました。

●国際人育成の初心に帰り  
外国語教育の発展に尽くす

「教育方法を教育・研究する研究科」開設の背景とは、どういったことでしょうか。

私たちは大きな願いを持って、本研究科の院生の研究指導および教育に当たっています。つまり、外国語の専門能力を身につけてもらうのは当然ですが、それを通して世界を見ることのできる人間、歴史の流れを読むことのできる人間を育てていきたいということです。

1998年ごろから基礎学力低下が問題となってきました。この危機的状況の中で、教育機関がきちんと国際人を養成しようとするなら、外国語の中でも特に英語教育の充実が不可欠です。2002年文部科学省発表の「英語の使える日本人の育成のための戦略構想」に続き、各都道府県で現職の英語教師を対象とした全員研修プログラムが始まっています。このような状況の中で、本研究科が外国語教育の指導法そのも

●「優れた英語教師育成関大プラン」開始  
大学院外国語教育学研究科長 齋藤栄二教授に聞く

## 大学院外国語教育学研究科 開設4年目の新展開 外国語教育のキーパーソン育成を目指す



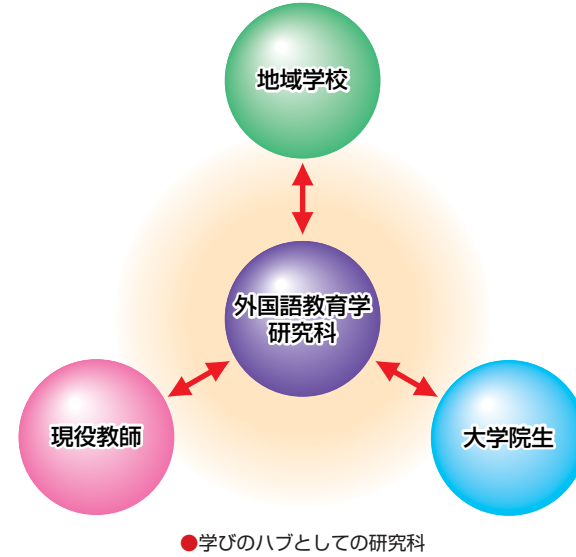
のを教育・研究し、教員の資質向上を図ることで、社会への貢献を考えたのです。

私自身、40年以上にわたり中学・高校の現場を見てきて、教育の衰退を肌で感じています。グローバル化の進む世界で日本が取り残されないためにも、早く立て直しを図らなくてはならないと教育機関としての使命を痛感しています。

●授業のレベルアップを図る指導法  
中学校とIT英語教材も共同開発

—他大学出身者、現役の教師など、多様な学生が在籍していますね。

修士課程は出身学部・学科を問わないので、いろいろなバックグラウンド



の方が集っています。関西大学以外の大学出身者が7割を超えるのも特徴の一つです。昼夜開講制にするなど社会人が学びやすいシステムも導入しています。教員はどこにも負けない超一流をそろえていると自負しています。

対象言語は6つあり、履修モデルとしては、教授法・学習者論などを扱う「外国語教育実践学」、教材開発・メディア利用について学ぶ「外国語教育教材・メディア学」、対象外国語の構造を掘り下げる「外国語分析学」の3領域があります。

4月から英語教育の強化に向けて、「優れた英語教師育成関大プラン」が順次始まります。具体的には、「達人英語教員登用プログラム」、「忙しい教師のための再教育プログラム」を設けています。前者は優れた実践をしている中学・高校の現職教員や指導主事の方々に、土・日や集中講義で大学院の教壇に立ていただいて、現場の技術を紹介してもらい、全学生への刺激とすることを意図しています。後者は、休職せずに学ん

でいる教師を対象とした履修プログラムです。1対1のチュートリアル授業が基本となります。レポート課題や論文指導を行いつつ、必要に応じて大学に来てもらうなど柔軟に対応していく予定です。いずれも英語教育の現場のキーパーソン

を対象として、その能力をより一層高める実践的な内容です。—地域の教育委員会や中学・高校とも連携。大学院教育の成果をいち早く現場に取り入れるものとして注目されています。

昨年11月には、京都御池中学校と共同でITを活用した英語教材を開発する協定を結びました。研究科の学生が非常勤講師として赴任した縁によるもので、生徒が英語の基礎を自習できるシステムの開発を目指しています。英語の時間数減少に対応して、生徒の学習意欲と英語力を伸ばす狙いがあります。また、高槻市教育委員会へ講師を派遣し、小学校や中学校での定期的な授業改善カウンセリングを行っています。こうした自治体からの要請は多くあり、今後もパイプの強化を図りたいですね。

その他の話題としては、博士課程在籍中のインド出身学生が外国人初の正規教員として京都市に採用されました。従来短期契約だったものが、日本人の教員と同じ資格で採用されたのです。

始まったばかりの研究科にとって励みになる話です。

●目標はディスカッション能力、  
高度なコミュニケーション能力

—本研究科で学ぶならば、何を習得してほしいですか。

外国語教育学一般についての専門的な知識はもちろんのこと、柔軟なもの見方も身につけてほしいですね。その土台としては鋭い分析力、批判的な思考力が要求されます。

しかし、それに加えて国の将来を預かる仕事に携わるには、会議で使える英語が必要です。これは外交交渉、企業の商取引などに使われるレベルの本当のエリート教育を指します。諸国との商取引が活発になればなるほど、法律や文化の違いをめぐるトラブルも増えるでしょう。そんな場合に備えて自分の意見を述べられる力を養っておかなくてはなりません。ディスカッション能力の習得は一つの到達点と言ってもよいもの。私個人としては、大学や国が国際交渉能力開発センターを作り、自在な外国語力で外交を切り抜ける術をはぐくむ人材の育成に当たると考えています。

研究科が人材を成長させる機関として機能し、高度な教授能力とコミュニケーション能力を育てていくことが我々の目標。学生の要望に耳を傾けつつ、時代の変化に応じて柔軟な展開をすることを念頭に、常に新鮮な改革に取り組んでいきます。

## KANDAI NEWS

りそな銀行と包括的連携に関する協定を締結

関西大学は2004年11月8日、りそな銀行と包括的連携に関する協定を締結しました。研究成果を地域社会へ還元し貢献すること、学生に就業体験の機会や実地教育の場を提供することなどが期待され、今後、具体的な施策を実施します。

銀行の営業企画への学生の参加をはじめ



め、銀行の取引先企業からの技術相談に対して「産学連携センター」を紹介するなど、活発な産学連携を推進。銀行の顧客からの法律相談に関しては、法科大学院の「リーガル・クリニック」を紹介。ビジネスインターシップ受入先企業の紹介や、銀行での学生アルバイトの採用なども含まれています。

先端科学技術シンポジウムを開催

本学の先端科学技術の研究および文部科学省、経済産業省等のプロジェクト研究の1年間の集大成として、「先端科学技術シンポジウム」が1月17日・18日に開催されました。京都大学教授平尾一之氏、大阪大学教授・アンジェスエムジー(株)取締役森下竜一氏の特別講演など、15件の招待講演、57件の一般講演、70点を超える技術シーズの展



示がありました。年々その関心が高まり、第9回の今年は約700人が参加。本学が保有する先端技術を社会に向け発信し、研究成果をもって社会に貢献できるものと期待されています。

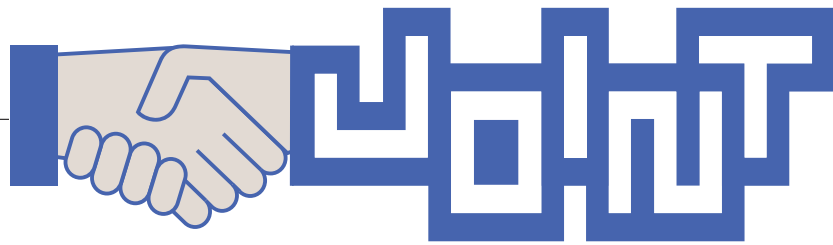
東京経済人倶楽部が発足

首都圏在住の本学出身の経済人が集う交流の場として、「関西大学経済人倶楽部」が発足しました。2004年11月26日、帝国ホテルで開かれた発足会には100余人が集まり、(株)パナソニックの南部靖之代表取締役グループ代表を会長に選出。上場企業の社長・会長54人を含む部



長級以上の本学校友300人が結束する組織として、今後の活動が注目されています。





## 安全な自然エネルギー 風力発電の未来を描く

集合型風車群による  
「都市型風力発電」実用化へ

◎工学部先端情報電気工学科 安田 陽助教授



——日本での風力発電開発の現状は？

従来は風車ブレードの形状などの機械工学的研究が中心で、発電機との整合性や制御、蓄電技術といった部分の研究はあまり盛んではありませんでした。しかし、発電機がオーバースペックの風車は弱い風では回りません。現在市販されている小型風車は秒速12mの風速で数百W～1kW程度の発電能力を持つものが主流ですが、都市部では平均風速で秒速12mを記録することはほとんどないのです。そうした点を踏まえて、スペックや効率だけではなく、景観や騒音、コスト面などあらゆる観点からのトータルプロデュースとして「都市型風力発電」を提案しています。

現在は中小企業が集まる東大阪環境ビジネス開発研究会と一緒に小型風車を作り、学内にも設置しています。開発したものの普及を考えるなら、市場のニーズを知る企業との連携が不可欠です。

——具体的にどのような応用が考えられますか。

例えば、風力発電と発光ダイオード（LED）を組み合わせた独立電源システムです。微風では数百Wの発電は無理でも1W程度なら可能なので、LED照明がターゲットです。公園内や郊外など、配電線から遠いところの街灯に電気を引くには数十～数百万円の工事費用がかかります。そこで風車を電源に使えばいいのです。1Wあたりの建設費用は化石燃料よりも高いですが、付加価値を付けてトータルコストで有利になる戦略を考えています。

**世**界中の原子力発電の1/10に相当する容量の風車が既に建設されている風力発電。特にヨーロッパでは、ここ数年目覚ましい躍進を遂げています。工学部先端情報電気工学科電力システム研究室の安田陽助教授は、産学連携による風力発電の実証に携わり、電気工学的なアプローチに取り組んでいます。研究の柱は「小型風車による都市型風力発電」と「大型風力発電設備の雷対策」について。今まで流体力学的な研究が主だったこの分野への新たな試みに、風力発電を実用化する第一歩として期待が高まっています。



集合型風車群による都市型風力発電の開発も一例です。太陽電池のようにマンションや一般家屋の屋上に設置できるタイプです。風速の弱い都市部でも数W～数十Wの風車を数万～数十万台設置すれば、総計でかなりのエネルギーを回収できます。実は風車本体よりも制御や強風対策に要するコストのほうが高い場合が多いのですが、付属部分を複数の風車で共有できますし、量産で単価も下がります。

このようなコスト意識を教えてくれたのは、連携している中小企業の方々です。いくら性能がよいものを開発しても、ユーザーに使ってもらえないのでは駄目だと。研究室にこもっていると自己満足に陥りがちですが、とても貴重な経験だったので、今後も学外との交流を図りたいですね。

——普及を目指して、今後の課題と展望は？

日本の風力発電事情には、地理的な要因もあります。人口の密集、山地で建設場所が限られること、台風や雷など過酷な自然環境など。電力系統にむやみに自然エネルギーを入れると、電力の質が落ちてしまいます。電力の品質を維持しながら、そこに不安定な自然エネルギーを投入するのはなかなか難しいのです。

しかし、それを実現させるのが我々の仕事。国際情勢を考えても、今後風力発電の需要が上がるのは必至です。日本のモーターや電気製品の技術は世界でもトップクラスですから、大型風車だけでなく特に小型風車は伸びていくでしょう。

企業には、「大学と連携するなら、消費者への啓蒙や子どもたちへの教育を忘れないでほしい」とお願いしています。日ごろ自分の家に風車があれば、電力の無駄な消費が実感できます。現に太陽発電を取り入れている家庭では、電気の消費量が減るそうです。そんな環境で育った子どもたちに、「自分もこんな勉強がしたい」と思ってもらえるような研究が理想ですね。

## 商店街活性化のカギは 若者の発想にあり！

「街に面白いものがあるか」  
地域特性を生かす企画を提案

◎商学部 三谷 真助教授



——地域連携のきっかけとフィールドワークの概要は？

私自身が阪神・淡路大震災で被災した後、地元・長田の商店街の復興支援にかかわり、その経験から理論よりも現場の視点が大事と、フィールドワークを重視するようになりました。その後、伊丹、尼崎、吹田の自治体やまちづくり機関TMOから、商店街活性化についての相談を受けるようになったのです。大型店進出に対する地元の対策や、多数の空き店舗を抱える商店街を復活させる計画にかかわる中で、学生の活動も始まりました。

調査では、商店街に面白い店があるか、商品は魅力的かといった〇×△式の評価を行います。伊丹が最初だったので、それを基に商業者対象の報告会を開催しました。

現在は尼崎と吹田を中心に取り組んでいます。尼崎は市の産業振興課、TMO、大学による連携で、計4大学が参加。提示されたテーマに沿って、各大学が担当エリアに合う企画を練るといふ具合です。吹田は市の産業労働室からの依頼で、こちらから市や商店街に呼びかけて「吹田やる気本舗」を発足させました。ゼミ生以外にも募って30人ほどのグループとなり、学生によるイベント企画などを行っています。

**地**域の商店街と自治体、大学の連携による経済支援プロジェクトが各地で展開されています。消費の冷え込みで空き店舗が目立つ商店街を活性化させようと立ち上がったのは、流通政策を専門とする三谷真・商学部助教授のゼミです。伊丹、尼崎、吹田の街をフィールドに、商店街と個々の店舗についてのヒアリング調査に基づいて新たな地域資源を提案。学生自ら商店街の掃除をしたり、仕入れを体験するなど、店主たちと交流を深めながら、街歩きタウンマップの制作やフリーマーケットの開催といった地元の人々を呼び込むユニークな企画を生み出しています。



●吹田・アジアンフェア（フリーマーケット）



●尼崎・アート展



●尼崎・公開ゼミ



●尼崎・新三和商店街の掃除

——学生と商店街の反応はどうか。

学生は楽しんでやっていますね。吹田で各店の目玉商品を作る「一店逸品運動」の調査をしましたが、実際に店のサービスを利用して、商店街を深く知ることができたようです。その中で「店によって温度差があり、全体のまとまりに欠ける」「百貨店にはない客との距離の近さを利用すべき」といった感想が出ました。尼崎ではアート展を開いた際の来場者が少なかったため、次回に向けて真剣に反省しています。社会の厳しさを体感することも狙いの一つです。

一方、商店街にとっても学生の声は刺激的です。例えば伊丹では「照明が暗い」との意見が出ましたが、常連客からはこういう指摘が出ないのです。学生の率直な意見は痛い半面、日ごろ若者の意見を聞く機会がない商業者には貴重です。

——今、一番大きな課題は何ですか。

吹田やる気本舗の事務局体制作りです。サークル的な活動として継続的にかかわっていくには、学生の定期的な会議への参加が必要ですが、商店街の会議は閉店後と時間が遅く、参加は難しいのが現状です。しかし、ゼミ以外のところまで広げたのだから、かかわり方も徹底しなくはいけません。学生の協力でこれだけのことがやれるという姿を見せることに意義があります。

もう一点は、町と商店街の関係づけ方です。たとえ若者向けのイベントをやっても、若者が近所に住んでいなければ成功しない。つまり居住地としての魅力を磨き、地域の特性を生かした仕掛けを作らないと、商店街だけの力では発展に限界があるのです。そこで、留学生が多い吹田でアジアンフェアをやりましたし、尼崎では地元の寺町を生かして商業と観光の組み合わせを考えています。東京・巣鴨のとげぬき地蔵尊のように、「街に面白いものがある」と思わせることです。



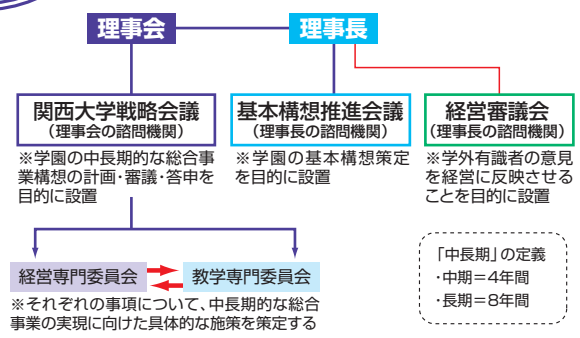
中長期戦略構想策定に向けて

意思決定体制を明確化、将来構想構築  
 「関西大学戦略会議」「基本構想推進会議」  
 「経営審議会」設置へ

大学教育に「競争と評価」が求められる時代となり、各大学が建学の理念や伝統を踏まえて、これからどのような学生を育成し、どのような社会貢献をしていくか、はっきりした構想を打ち出し、独自の存在意義を社会に強く訴えていかねばなりません。そのためには、不断の改革を推し進めていくことが必要不可欠です。学校法人関西大学は、中長期的構想を戦略的に策定する意思決定体制を明確化し、経営戦略を具体化します。

総合的に、また迅速に将来構想の検討を進めるためには、法人と教学が一体となり、高い理念に裏付けられ、かつ着実な財政的展望に裏付けられた中長期的な構想を立案・計画・審議・決定する体制を構築することが課題です。この課題を克服するため、法人の中長期構想を日常的に審議し策定する全学組織を創設し、理事会・教員組織・事務組織の三者が十分な意思疎通を図り、理事会の経営方針と教職員個々人の経営意識とのギャップを埋めるよう努めなければなりません。

理事長の諮問機関として、学園の基本構想を策定し、理事長に答申する「基本構想推進会議」を設置します。



●中長期戦略構想策定体制 概念図●

理事長はその答申を受けて、理事会へ基本構想を上程します。理事会はそれを受けて審議のうえ、「基本構想に基づく中長期的な総合事業構想の計画」について、「関西大学戦略会議」に諮問します。

理事会の諮問機関である「関西大学戦略会議」では、学園の中長期的な総合事業構想を計画・審議し、理事会へ答申します。また、同会議の検討部会として、「経営専門委員会」と「教学専門委員会」を設置し、中長期的な総合事業構想の実現に向けた具体的な施策を策定します。

そのほか、外部の有識者の参画を広く求め、経営にその知見を生かすことにより、法人の運営に対して学外の意見を積極的に反映させることを目的に、理事長の諮問機関として「経営審議会」を設置します。

今回の「中長期戦略構想策定体制」では、理事会と理事長の権限・責任を明確にするとともに、「関西大学戦略会議」は最高意思決定機関である理事会の諮問機関、「基本構想推進会議」は最高執行責任者である理事長の諮問機関との位置付けとなっています。

落語家・桂三枝さんが客員教授に就任



本学OBの落語家・桂三枝氏さんが、本年4月から文学部の教壇に立つことになりました。客員教授として、総合講座「日本学」Ⅰの「笑いの人間学」を担当。桂三枝さんは、1943年生まれ、大阪市立市岡商業高等学校卒業、1963年に関西大学商学部へ入学。在学中の1966年12月に落語家・桂小文枝(現五代目・桂文枝)氏に入門。2003年7月から上方落語協会の第6代会長を務めています。「笑いの人間学」は、実践と理論の両面から“笑いの文化”にアプローチしていくもので、桂三枝教授が「ユーモアの成立」をテーマに実践的な講義を担当し、「日本笑い学会」会長の井上宏本学名誉教授が理論を担当します。

馬場・厩舎が移転、竣工



体育会馬術部の馬場・厩舎が千里山キャンパスから高槻キャンパスに移転し、新しい馬場・厩舎が昨年11月に完成しました。馬場は60m四方の規模を有し、砂塵対策用の散水設備を設置するとともに、各種競技にも対応可能な施設となっています。これを機に馬術部のさらなる活躍が期待されます。